

Culture and self-perception in Japan and the United States. 日本とアメリカ合衆国における文化と自己知覚

Cousins, S. D., (1989), Culture and self-perception in Japan and the United States. JPSP, 56(1), 124-131.

-Rep. 小森めぐみ¹.

ABSTRACT

文化的意味システムが日本人、アメリカ（合衆国）人大学生の自己の知覚に与える影響を検討した。合衆国における自己と比べて日本人の自己では社会的文脈が重要な意味をもつことを考慮して、二つの形式の自由記述形式のフォーマットを作成した。一つは文脈情報をもたないTSTであり、もう一つは様々な状況におかれた自分に付いての記述を求めた文脈付きの質問であった。過去に行われた研究同様に、TSTでは日本人は抽象的な心理的属性をアメリカ人よりも書かずに自己記述を限定する傾向があった。しかし、日本人はより高次の抽象化を必要とする全般的な自己参照においては、アメリカ人よりも記述の数が多かった。これらの結果は二つの文化における自己の知覚の違いが認知的能力の違いではなく、人間についての文化的概念の多様性の影響により生じていることが示された。

- ・ 文字をもたない、非西洋系の文化は、抽象的な性格特性ではなく、むしろ状況に結びつけられた行動や社会的役割に注目することから、“具体的”と言われてきた (Hallpike, 1979; Luria, 1974/1976; Werner & Kaplan, 1956)
- ・ この具体性は長いこと彼らに認知的な能力が欠如しているか、抽象的思考を必要とするような社会的環境の欠如が原因とされてきた。
- ・ 本研究では、対人知覚の中でも特に日本人とアメリカ人の自己知覚を検討する。
- ・ 日本は非西洋社会の中では珍しく、十分に工業化された近代国家だが、一方で多くの研究では日本人の思考は具体性が強いことが報告され (Ishida, 1974; H. Nakamura, 1964)、社会的役割や行動の状況に従属する自己をもつことが指摘されてきた (DeVos, 1973; Miyoshi, 1974; Nakane, 1970)
- ・ 日本人が近代的ならば、なぜ彼らの自己の知覚の具体性の源泉はいったいなんなのか？

Interpretation of abstract-concrete dichotomy in cross-cultural research.

- ・ 文化間研究では具体性 (concreteness) は知覚される刺激との結びつきの強さや、現実場面との関係から意味を引き出す方法のことを指す
 - 物事を独立した物体や属性として扱う ⇔ そこから状況をこえた一般性を引き出す
- ・ 対人知覚における具体的試行とは、目にしている行動を日常生活の中だけでとらえること
 - ⇔ 状況、時間を越えた行動の抽象的な意味を引き出す

Cognitive and experiential interpretations

- ・ 非西洋人が具体的試行を行うのは、認知能力の発達との観点 (Hallpike, 1979; Inhelder & Piaget, 1964; Werner, 1948) から論じられてきた。
 - 思考は目の前にある刺激に結びついた具体的なものから、カテゴリを考えていく抽象的なものへと発達していく (Piaget, 1954, 1967)
- ・ 非西洋人が具体的思考を行うのは、文字をもたない彼らが発達初期段階と同じだからと考えられた (see Dasen, 1972, for a review, Harter, 1983; Hallpike, 1979; Livesley & Bromley, 1973)

¹ 一橋大学大学院博士課程.

- ・ 近代化政策の影響をあげる研究者もいたが(Goody, 1977; Greenfield, 1972, Horton, 1967)、前提はだいたい同じ (近代化された環境では抽象的思考が適応的)
- ・ しかし、ここ20年間にこの前提には疑問があがっている
 - 抽象的思考は課題依存であって、3歳児でも課題によっては抽象的思考が可能(Gelman, 1978, Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes0Braem, 1976)
 - 近代化の効果もそこで必要とされるスキルのみに影響する限定的なもので、抽象的思考能力全般には影響しない(Cole, Sharp, & Lave, 1976; Scribner & Cole, 1981)

Cultural Interpretation

- ・ 最近では、自己知覚に違いをもたらすものとして、認知能力や経験の違いではなく、文化の影響が指摘されはじめている(Miller, 1984; Shweder & Bourne, 1984)。
- ・ 象徴的人類学の分野では、文化は自己と世界の知覚に影響する共有された暗黙の意味構造であるといわれている(Geertz, 1973, 1975; Schneider, 1976)
- ・ これを鑑みると、抽象的思考に見られる文化的多様性は、歴史的に伝達された集団的想像力の産物である文化内の前提から導き出されるとも考えられる(Sahlins, 1976; Shweder & Bourne, 1984)
- ・ つまり、自己、人といった表象は文化によってその概念表象が異なる可能性がある
- ・ 二つの先行研究(Shweder & Bourne, 1984; Miller, 1984)では、インド人とアメリカ人の対人知覚が比較された。
 - その結果、インド人のほうが具体的で状況特定の記述を行い、アメリカ人の方が多くの傾向性推論を行っていた。
 - しかし、抽象的思考の能力を調べる別のテストでは、インド人とアメリカ人のあいだに違いは見られなかった。
- ・ どちらの研究でも、この結果は文化の影響、特に人間という概念の違いが原因だと考えられた。
 - 個人主義的観点(individualistic view) : 自立、自己の追求を強調し、社会から独立した自己観をもつ
 - 社会中心的観点(sociocentric view) : 他者とのつながり、共感、状況への適応を重視。この前提があるためにインド人は対人間の状況や実際の行動に注目した具体的な思考を行ったと考えられた。

Aim of present study

- ・ 本研究は、非西洋圏における自己知覚を実証的に検討する。対象国として識字率99%を誇る日本で研究を実施して、能力の欠如という代替説明を棄却する。
- ・ 鍵となるのは文化によって異なる自己観 (個人主義的、社会中心的)
 - 個人主義的前提では、個人は状況に縛られない行動の規則性が希求される
 - 社会中心的前提では、他者との関係や相互依存性が重視され、それらが生じる源泉となる社会的状況が重視される。その流れを受けて自己知覚も具体的になる
- ・ 社会的文脈は日本の自己にとって重要と考えられるため、状況手がかりがない場合は特性推論は控えられ、逆に文脈が補われた場合には抽象的な特性推論が促進されると予測される
- ・ 研究ではTSTと状況を加えた自由記述の質問が尋ねられた。日本人は後者では行動の概要を抽出し、抽象的思考を行うだろう。

Method

実験参加者：日本人大学生 159 名（慶応生男 42 女 54、兵庫教育大生女 69 名）とミシガン大生 111 名（男 50 女 61）。

教示：“あなたは誰？”という単純な質問に対して、下に書かれた 20 の空白の中にそれぞれ違った答えをいれてください。誰か別の人ではなく、自分自身に答を与えるように書いてください。思いついた順に書いていってください。論理や重要性に気をとられる必要はありません。速いペースで進んでください。

従属測度：教示の下に“私は…”からはじまる 20 の空白が書かれていた。その次に、状況つきの自由記述の質問が加えられた。家、学校、親友と一緒にという状況下でのあなたのことを書いてください。という教示が与えられた。最後にまた TST に戻り、その中でも自分にとって重要と思われるもの 5 つにチェックをいれるよう教示された（結果は全体とほぼ変わらないので今回は略）。

コーディング基準：過去の研究 (McPartland, Cumming, and Garretson, 1961; Hartley, 1970) に基づいたコード基準を使用した。コード基準は 4 つの基本カテゴリ (A. 外見、B. 社会、C. 属性、D. 全般) に分けられていたが、さらに従属性を 5 に、全般を 2 に分割した (カテゴリーは表 2 参照)。

- C4: 限定的属性はとき、場所、相手に言及したうえでの属性記述
 - C5: 純粋な属性は上記の言及がない属性記述
 - D1: existential は唯一の自己という側面を強調
 - D2: universal は普遍的な自己という側面を強調
- ・ 今現在の状況、他者からみた自分、ナンセンスな内容は“その他”にコーディングされた。
 - ・ 自由記述のコーディングもほぼ同じだが、自己と無関係な記述は Object というカテゴリーが加えられた。
 - ・ 分析単位は動詞と述部の組み合わせを 1 ユニットとして数えた。
 - ・ コーダーは著者とアメリカ人、日本人のコーダー計 3 名。一致率は著者&日本人で $r=.88$ 、著者&アメリカ人で $r=.86$

Results

- ・ 個数の影響を除く為に、各参加者ごとに割合を算出した。性差はほぼ見られなかったため、ここでは取り扱わない。

TST データの結果

- ・ C5 純粋な属性はアメリカ人のほうが日本人よりも多く記述していた ($t(256)=11.34, p<.001$)
- ・ A 外見、B. 社会、C1 嗜好、C2 願い、C3 一般的活動は日本人のほうがアメリカ人よりも多く記述していた ($t_s(256)>2.18, p_s<.05$)。これは Bond and Tak-sing(1983) に一致する結果
- ・ さらに、D2 普遍的自己記述も日本人のほうがアメリカ人よりも多かった ($t(256)=4.84, p<.001$)。D1 唯一の自己については、日本とアメリカに差は見られなかった。

状況データの結果

- ・ 状況が記載されたうえでの記述は、TST データとは反対の結果だった
 - C5 純粋な属性は日本人のほうがアメリカ人よりも多く、C4 限定的属性はアメリカ人の方が日本人よりも多かった ($t_s(267) < 4.25$, $p_s < .01$)。
 - C1 嗜好、C2 願いについても、アメリカ人の方が日本人よりも多かった ($t_s(267) < 2.89$, $p < .01$)
- ・ 回答に対して文化×状況有無の ANOVA が実施された (表 3. 下位検定なし!)
 - C5 純粋な属性の場合は文化の主効果と交互作用が有意
 - C4 限定的属性の場合は文化と状況有無の主効果、交互作用が有意
 - 文化の主効果は B 文化、C3 活動でも見られた
 - 状況有無の主効果は B 社会、C1 嗜好、C3 活動でも見られた
 - 交互作用は B 社会、C1 嗜好、C2 願い、C3 活動でも見られた
- ・ 交互作用が関連するカテゴリで見られたことは、自己知覚の抽象性と具体性に見られる文化差が、状況の有無によって逆転することを示している

Discussion

Evaluation of experiential and cognitive explanations.

- ・ 日本という国は非西洋ではあるけれども近代国家であり、その教育システムはアメリカのモデルとなる可能性も秘めている (Rohlen, 1985; M. White, 1987)。
- ・ しかし、それにもかかわらず日本人の自己知覚はより具体的。これを日本人が技術的にだけ進歩して抽象的な思考能力はまだ途上だという主張で片付けることはできない。それに矛盾する事象はあちこちにある
- ・ また、日本社会の近代性を引き合いにださなくても、本研究の結果だけからも日本人が十分に抽象的思考能力を備えていると考えることが可能
 - TST への回答を見てみると、D2 普遍的属性のカテゴリでの日本人の得点はアメリカ人を上回っている。
 - 普遍的属性の推論はより高次な抽象的思考の結果であって、日常生活からは引き出すことができない
- ・ そして、状況を補った形式での質問での結果は、日本人も適切な概念枠を与えられれば、アメリカ人と類似の抽象的な思考 (特性推論) を行うことを示している。

Impact of cultural meaning systems on self-perception.

- ・ 文化の前提の違いという考え方から結果を説明する

TST データの結果を文化から解釈する

- ・ 状況についての情報が欠如している TST 形式の質問は、個人主義の文化には状況からの解放とうつり、自己の自立を示すことができる。これは自分のうちにある“特徴”の核をなしている。
- ・ しかし、社会中心主義の文化からみると、このセッティングは不自然。文脈を補う必要がある
- ・ ただし、社会中心主義の文化で見られる人類との関連性 (D2 カテゴリでの高得点) も抽象的思考の産物と考えることが可能

- ・ 上記の結果を考慮すると、日本の自己知覚は低次のカテゴリ次元については具体的で、高次のカテゴリ次元では抽象的になっており、どちらも他者とのつながりを意味しているといえる。これは能力の欠如からは説明できない。
- ・ 一方で、注レベルの抽象化（特性推論）はアメリカ＝個人主義の特徴といえる

状況つきデータの結果を文化から解釈する

- ・ 状況手がかりがつけば、日本人は自己という意識をもつために必要な情報を補足する必要がなくなり、より抽象的な自己を反映した回答（＝特性推論）ができるようになる。
 - ただし、その抽象化は目の前の状況下の経験のみにむけられるもの。対人間のつながりを重視する自己観を持つ場合には、状況をこえた抽象化は不要だから。
- ・ 一方、アメリカ人は状況がついてくるとより具体的な自己を記述するようになった。これは状況からの解放が阻止され、ここでは特性が彼らにとって意味をなさなくなるためである。
 - アメリカ人の特徴として、より状況の存在を強調する記述を行ったということがあげられる（私は、弟といるときには普通は○○）。これは、自分が状況とは別だということ表現したいがためとも考えられる。

Interacionism as a Western model of behavior as distinct from a non-western cultural ethos

- ・ 西洋人の行動における人と状況の相互作用の特徴も相互作用説として指摘されはじめている。この考え方は文化の前提という考え方とも対応する

Individuality versus individualism

(おわらず。ごめんなさい。)